

七尾市

古府タブノキダ遺跡

2 0 1 6

石 川 県 教 育 委 員 会

(公財) 石川県埋蔵文化財センター

ふるこ いせき
古府タブノキダ遺跡

2016

石川県教育委員会
(公財)石川県埋蔵文化財センター

例 言

- 1 本書は古府タブノキダ遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の所在地は石川県七尾市千野町、南ヶ丘町地内である
- 3 調査原因は一般国道470号能越自動車道七尾氷見道路建設であり、同事業を所管する国土交通省北陸地方整備局金沢河川国道事務所が、石川県教育委員会に発掘調査を依頼したものである。
- 4 調査は公益財団法人石川県埋蔵文化財センターが石川県教育委員会から委託を受けて、平成25年(2013)度から平成27(2015)年度にかけて実施した。業務内容は現地調査、出土品整理、報告書原稿作成および報告書刊行である。
- 5 調査に係る費用は国土交通省北陸地方整備局金沢河川国道事務所が負担した。
- 6 現地調査は平成25年度に実施した。期間・面積・担当は下記のとおりである。
期 間 平成25年6月6日～同年8月26日
面 積 1,000㎡
担 当 調査部県関係調査グループ
石田和彦(主幹)、澤辺利明(主幹)、木原伊織(嘱託調査員)、清水晃太郎(嘱託調査員)
- 7 出土品整理は平成26年度に実施し、県関係調査グループが担当した。
- 8 報告書原稿作成・刊行は平成27年度に実施し、調査部県関係調査グループが担当した。執筆・編集は澤辺利明が行った。
- 9 調査には下記機関の協力を得た。
国土交通省北陸地方整備局金沢河川国道事務所、七尾市教育委員会
- 10 調査に関する記録と出土品は石川県埋蔵文化財センターで保管している。
- 11 本書についての凡例は下記のとおりである。
 - (1) 方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標Ⅶ系に準拠した。
 - (2) 水平基準は海拔高であり、T.P.(東京湾平均海面標高)による。
 - (3) 遺構の名称は、下記の略記号に番号(算用数字)を付し表記した。
S I : 竪穴建物、S B : 掘立柱建物、S D : 溝、S K : 土坑、P : 柱穴・小穴、
S X : その他(不明確遺構等)
 - (4) 遺物番号は挿図・観察表・図版で対応する。なお、観察表には報告番号や出土遺構、器種、法量のほか、出土品整理時の図化番号を記載した。
 - (5) 遺物実測図は、須恵器は断面黒塗り、その他は白抜きとした。
 - (6) 須恵器の編年軸、暦年代観は下記に依拠した。

田嶋明人 1988「古代土器編年軸の設定」『シンポジウム北陸の古代土器研究の原状と課題』北陸古代土器研究会

田嶋明人 2013「第4章第1節平安期土器の暦年代と横江荘遺跡の変遷」『加賀横江荘遺跡』石川県白山市教育委員会

西暦 600		700					800		900	
I ₁ 期	I ₂	II ₁	II ₂	II ₃	III	IV ₁	(古)IV ₂ (新)	V ₁	V ₂	VI ₁

【参考文献】

垣田修児^{ほか} 1983『七尾市古府タブノキダ遺跡』石川県立埋蔵文化財センター

岡田雅人^{ほか} 1990『七尾市小池川原地区遺跡』七尾市教育委員会

七尾市史編さん専門委員会 2002『新修七尾市史1考古編』七尾市役所

川畑 誠^{ほか} 2015『七尾市栄町遺跡』石川県教育委員会・(公財)石川県埋蔵文化財センター

久田正弘・和田龍介 2015『七尾市古府・国分遺跡Ⅰ』石川県教育委員会・(公財)石川県埋蔵文化財センター

目 次

第1章 調査の経緯と経過	1
第1節 調査の経緯	1
第2節 発掘・整理作業等の経過	1
第2章 遺跡の位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の結果	6
第1節 概 要	6
第2節 検出遺構・遺物	6
第3節 ま と め	17

写 真 図 版

報 告 書 抄 録

挿 図 目 次

第1図 調査区の位置	2	第9図 S I 1・2 炉	11
第2図 工事計画と調査区の位置	2	第10図 S I 3・4	12
第3図 遺跡の位置	3	第11図 S I 4、S B 1、S D 2	13
第4図 古府タブノキダ遺跡周辺の遺跡	5	第12図 S K、S D、S X	14
第5図 調査区全体図、調査区北壁土層断面図	7	第13図 出土遺物 1	15
第6図 調査区平面図 1	8	第14図 出土遺物 2	16
第7図 調査区平面図 2	9	第15図 1・2次調査区全体図	18
第8図 S I 1・2	10		

表 目 次

第1表 調査・整理体制	3	第3表 出土遺物観察表	17
第2表 周辺の遺跡一覧表	5		

図 版 目 次

図版 1 遺構 1	図版 3 遺構 3	図版 5 遺構 5
図版 2 遺構 2	図版 4 遺構 4	図版 6 出土遺物

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯

本書は、一般国道470号能越自動車道七尾氷見道路建設に係る古府タブノキダ遺跡の発掘調査報告書である。能越自動車道は能登半島に初めて整備される高速道路であり、石川県輪島市から同七尾市、富山県高岡市等を経て、小矢部砺波ジャンクションで北陸自動車道や東海北陸自動車道に接続するものである。七尾氷見道路はその間の県境を介した七尾市～富山県氷見市、延長28.1kmの区間であり、調査終了後の平成27年2月28日には開通している。

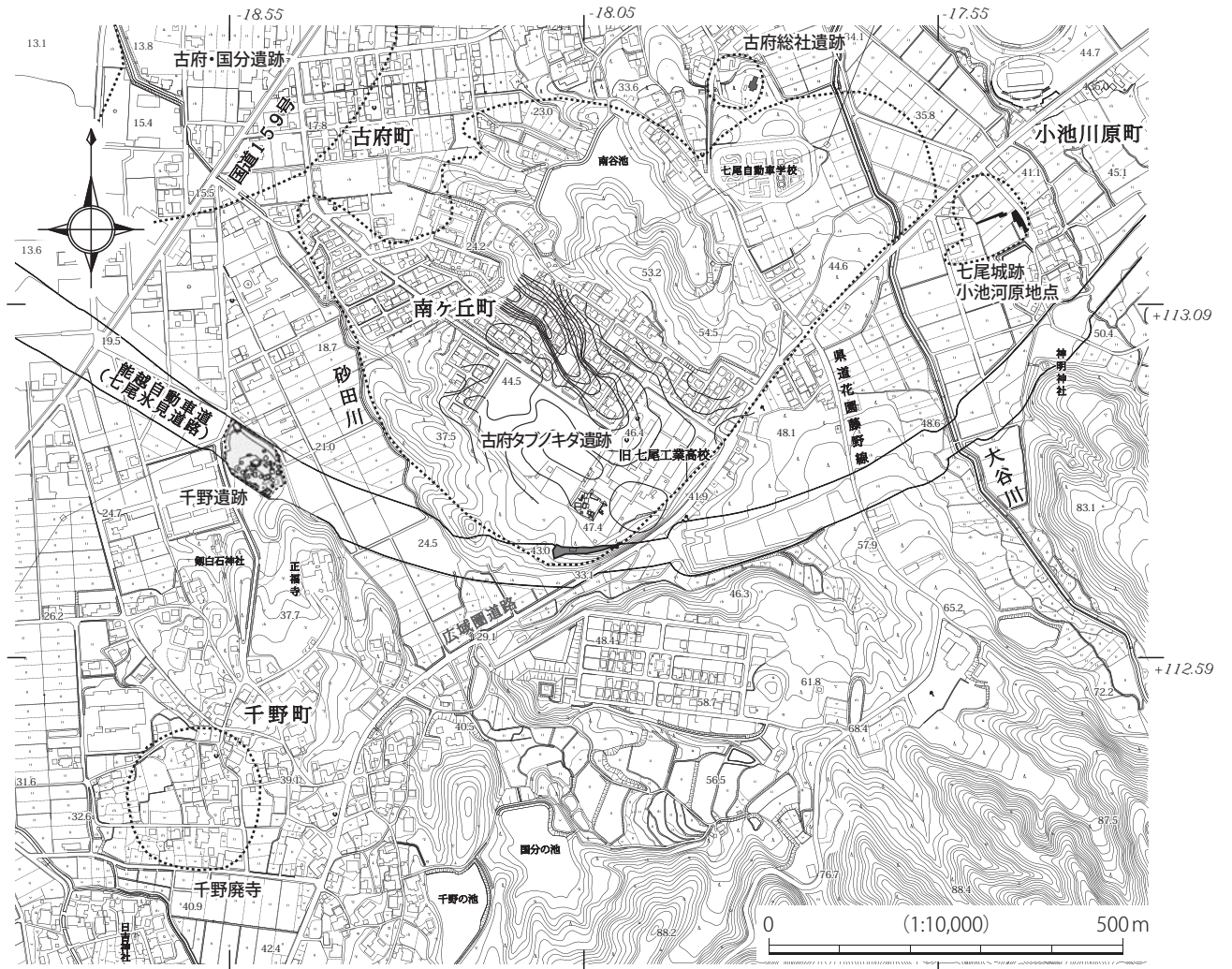
石川県教育委員会事務局文化財課（以下「文化財課」）では毎年、国・県等の開発部局に対し実施予定の事業照会を行い、各事業について埋蔵文化財の保護が図られるよう調整を行っている。上記道路建設についても所管の国土交通省北陸地方整備局金沢河川国道事務所（以下「金沢河川国道事務所」）と協議しながら、順次、分布調査等により埋蔵文化財包蔵地の有無を確認し、埋蔵文化財が確認された箇所については、その取り扱いを協議し、発掘調査等の保護措置を実施してきた。古府タブノキダ遺跡については平成23年度実施の事業照会に係るものである。七尾市千野町から南ヶ丘町にかけての台地上には、周知の埋蔵文化財包蔵地「古府タブノキダ遺跡」が知られており、昭和57年には県立七尾工業高校（平成16年に県立七尾東雲高校に統合、平成18年廃校）第2体育館建設に際し発掘調査が実施されている。事業区域はこれに接することから、遺跡範囲の確定や保護措置等に必要のデータを得ることが必要と判断された。平成24年12月、金沢河川国道事務所から石川県教育長あてに埋蔵文化財分布調査の依頼があり、当該地周辺は3月14・15日に分布調査を実施、一部で遺構・遺物が確認された。文化財課は「古府タブノキダ遺跡」の分布を確認した旨報告するとともに、埋蔵文化財の保護が図られるよう設計の見直し等を要請した。以後、協議を継続した結果、現状でルート変更は困難であることから、当該箇所については事前の発掘調査を行い記録保存とすることとなった。

第2節 発掘・整理作業等の経過

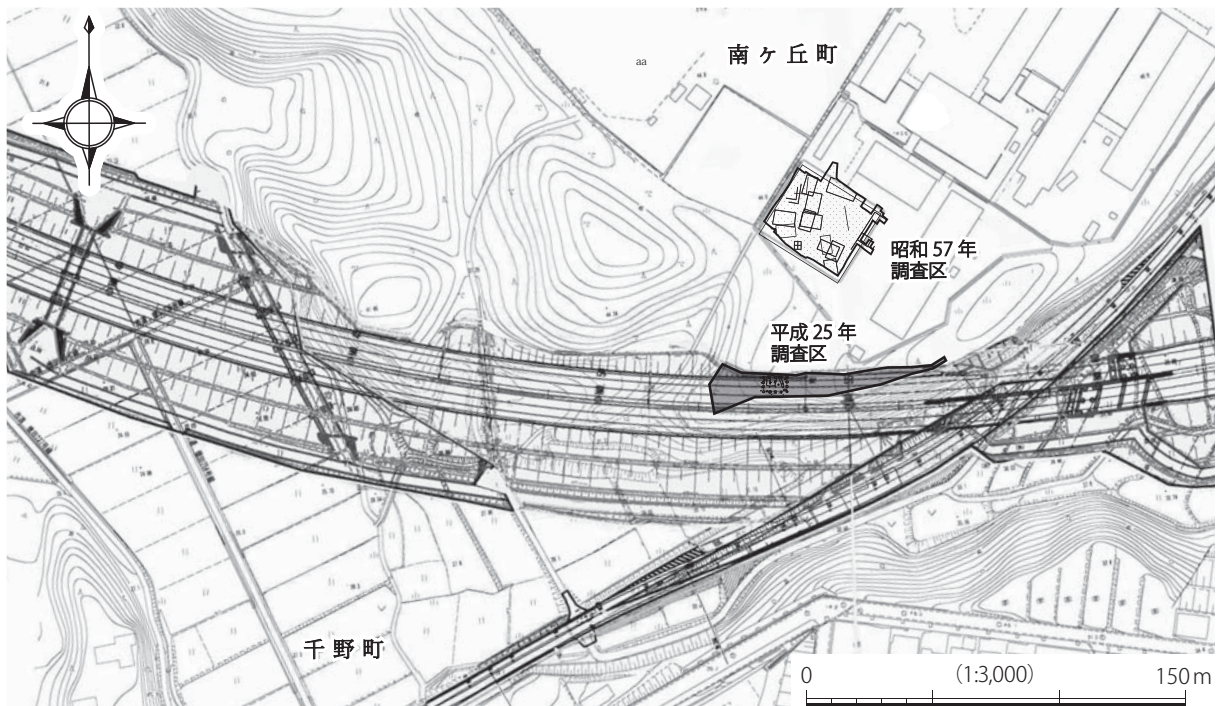
(1)発掘調査 金沢河川国道事務所からの依頼を受けた県教育委員会の委託事業として、平成25年度に公益財団法人石川県埋蔵文化財センター（以下「埋文センター」）が実施した。調査面積は1,000㎡であり、前半（着手～7月末）を石田和彦、清水晃太郎が、後半（8月）を澤辺利明、木原伊織が担当した。5月23日に金沢河川国道事務所、文化財課、埋文センターによる現地協議を行った。6月6日から表土除去着手。並行して調査地南辺に落下防止柵設置。6月14日に発掘機材搬入。調査区はA～C区に大別し東側のA区から発掘着手した。7月25日にA・B区の空中写真測量を実施。続いてC区の調査を行い、8月12日にC区の空中写真測量を実施。補足作業を終え8月20日に発掘機材撤収、8月26日に金沢河川国道事務所に現場を引き渡し現地調査を終了。出土品については、七尾警察署長に埋蔵物発見届（8月26日付財理225号）を提出。9月12日付教文2165号で文化財として認定された旨、通知を受けた。

(2)出土品整理・報告書原稿作成・報告書刊行 事業者から依頼を受けた県教委の委託事業として埋文センターが実施した。担当は県関係調査グループである。出土品整理は平成26年度に実施。内容は遺物の記名・分類・接合・実測・トレースおよび遺構実測図のトレースである。報告書原稿作成および刊行は平成27年度に実施した。

第2節 発掘・整理作業等の経過



第1図 調査区の位置



第2図 工事計画と調査区の位置

業務内容	発掘調査	出土品整理	報告書原稿作成・刊行
期 間	平成25年6月6日～同年8月26日(現地調査)	平成26年4月17日～平成27年3月31日	平成27年4月10日～平成28年3月31日
調査・ 整理主体	(公財)石川県埋蔵文化財センター (理事長 木下 公司)	(公財)石川県埋蔵文化財センター (理事長 木下 公司)	(公財)石川県埋蔵文化財センター (理事長 木下 公司)
総 括	橋本 定則(専務理事)	小崎 隆司(専務理事)	柴田 政秋(専務理事)
事 務	栗山 正文(事務局長)	栗山 正文(事務局長)	釜親 利雄(事務局長)
	山口 登(総務グループリーダー)	山口 登(総務グループリーダー)	長嶋 誠(総務グループリーダー)
	小松 孝弘(総務グループ主幹)	長嶋 誠(総務グループ主幹)	東 賢吾(総務グループ専門員)
調査・整理	福島 正実(所長)	福島 正実(所長)	福島 正実(所長)
	藤田 邦雄(調査部長)	藤田 邦雄(調査部長)	藤田 邦雄(調査部長)
	松山 和彦(県関係調査グループリーダー)	松山 和彦(県関係調査グループリーダー)	松山 和彦(県関係調査グループリーダー)
担 当	石田 和彦(県関係調査グループ主幹)	澤辺 利明(調査部県関係調査グループ主幹)	澤辺 利明(調査部県関係調査グループ主幹)
	澤辺 利明(県関係調査グループ主幹)		
	木原 伊織(県関係調査グループ嘱託調査員)		
	清水晃太郎(県関係調査グループ嘱託調査員)		

第1表 調査・整体系体制

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

石川県は本州のほぼ中央にあって、南部の加賀地方、北部の能登地方に分けられる。能登地方は日本海に突き出た能登半島を擁し、遺跡の所在する七尾市はその中程東側に位置する。七尾市は、半島基部を東西に横切る邑知低地帯北東端の旧七尾市と、七尾湾岸の田鶴浜町、中島町および能登島町が平成16年10月に合併し誕生した、人口約5万6千人の能登の中核都市である。古府タブノキダ遺跡は七尾市の東部を占める旧七尾市域中ほどに位置する。周辺の地形は西の中能登丘陵、その東に沿う徳田台地、中央の邑知地溝帯、富山県との県境に連なる石動山系の山地に大別することができる。また、羽咋市側で幅約5kmあった邑知地溝帯は七尾市域では1.5kmほどに幅を狭め、石動山系から流下する大谷川や笠師川などにより形成された小扇状地が占める場所も多い。古府タブノキダ遺跡は、石動山系山麓に接する標高46m前後の台地上にあって、古府町・千野町・南ヶ丘町にかけて東西約600m×南北約600mに広がる古墳時代後期～奈良時代の集落遺跡である。発掘調査箇所は台地南端に位置し、西部が千野町地内、東部が南ヶ丘町地内にあたる。その南辺は削平され眼下の道路との比高差約13mの崖となっている。



第3図 遺跡の位置

第2節 歴史的環境

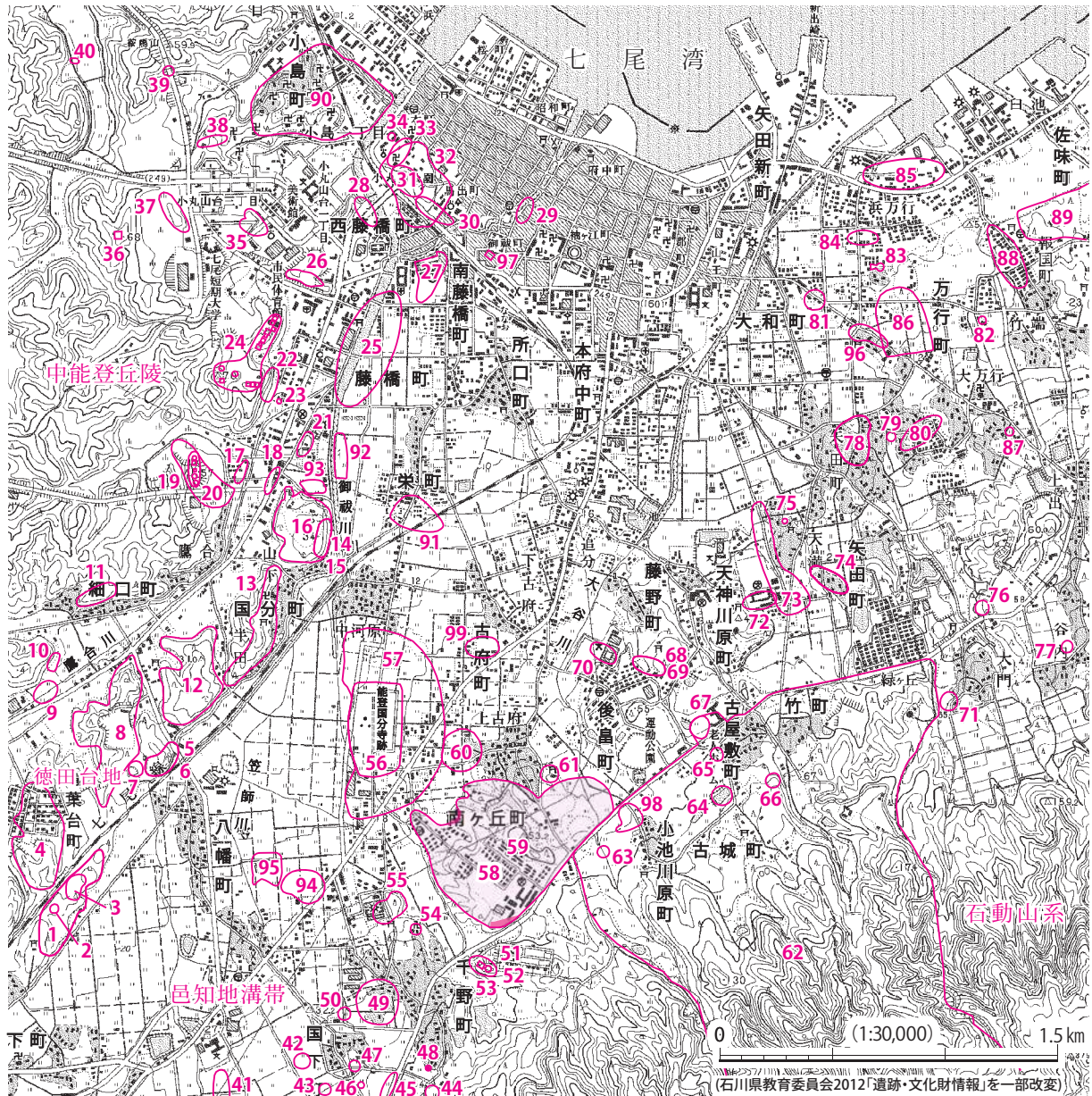
調査地周辺には「古府(ふるこ)」、「国下(こくが)」、「国分(こくぶ)」など古代官衙関連施設の存在を伝える地名が存在し、「矢田(やた)」として能登郡八田郷の遺称が残る。遺跡の立地する台地北辺には能登国総社が鎮座し、眼下の平地部に能登国分寺(56)、調査地東方約600mには国分尼寺とされる千野廃寺(49)が所在するなど、古代において一帯は能登国府がおかれた能登国の中枢地であった。従来、旧七尾市域では石動山系裾や中能登丘陵周縁、徳田台地に多くの遺跡が知られ、その間の邑知地溝帯域は希薄な状態であったが、近年、能越自動車道や国道159号バイパス建設、これに係る各種開発が及んだ結果、平地部においても古代の遺跡が多数発見・調査され、当時の様相を具体的に語ることのできる地域となってきている。以下、時代毎に遺跡を概観する。

【縄文時代】徳田台地周辺に多い。国分尼塚遺跡(16)では前期前葉の竪穴建物が、国分高井B遺跡(18)では前期後葉の、国下縄文遺跡(47)では中期初頭の土器が出土。沿岸部の小島西遺跡(90)では晩期末～弥生時代中期初等の貯蔵穴群が検出されている。【弥生時代】鷹合川や御祓川沿いの豊かな生産基盤のもと徳田台地周辺で多くの遺跡が知られる。前期には小島六十苧遺跡(35)が、中期では方形周溝墓や土坑墓が確認された細口源田山遺跡(8)が、また、近年調査された千野遺跡(55)では中期後半の竪穴住居や方形周溝墓が確認されている。国分高井山遺跡(20)は後期の高地性集落とされ、国分遺跡(92)では河道跡から後期後半の土器が多量に出土し儀式あるいは祭祀後の片付け跡とみられている。

【古墳時代】石動山系裾部や徳田台地上で前・中期古墳群が形成される。石動山系では前期においては千野高塚1・2号墳(52・53)が知られるのみであるが、中・後期には七尾湾を望む台地上に一帯の盟主墳である矢田丸山古墳(78)、矢田高木森古墳(83)を擁する矢田古墳群が形成される。終末期には千野横穴群・千野1号墳(48)などがある。徳田台地周辺では、能登最古の前方後方墳であり銅鏡や多数の銅鏃などが出土した国分尼塚1・2号墳(14・15)や中期の国分高井山古墳群(19)、古墳終末期では徳田台地南端で能登国造墓にも比定される院内勅使塚古墳や下町横穴群が築かれる。七尾南湾を臨む台地上の万行遺跡(89)では弥生時代中期から集落が継起するが、古墳時代初頭にいたり南北に整然とした配置をなす大型総柱建物群が成立し、臨海の物資集積地として能登地域を超えた政治勢力の関与が指摘されている。そのほか、石動山系裾や邑知地溝帯内でも集落遺跡がみられはじめ、千野林田遺跡(94)、国分遺跡、国分B遺跡(93)、栄町遺跡(91)などが確認されている。

【古代】本遺跡の立地する丘陵・台地部や能登国分寺周辺の平地部で多くの遺跡が確認されている。官衙的性格を持つ遺跡が多く、その端緒は古府タブノキダ遺跡(58)や七尾城跡小池川原地点(98)にある。古府タブノキダ遺跡については第3章に記す。七尾城跡小池川原地点では墨書土器のほか帯金具・鞘口金具が出土し、官人居宅と推定される。一方、平地部では7世紀後半以降、能登国分寺跡、古府・国分遺跡(57)で遺構・遺物が認められるが、その多くは8世紀中頃以降に盛期を持ち、天平勝宝9(757)年の第2次能登立国に伴う官衙関連の諸施設や集落が多いとみられる。丘陵・台地部では七尾城(62)、千野遺跡など、平地部では古府ヒノバンデニバン遺跡(99)、千野林田遺跡、八幡大皆口遺跡(95)のほか、御祓川沿いで藤橋遺跡(25)、国分遺跡、栄町遺跡などがある。徳田台地ではその内部に八幡昔谷遺跡(4)が存在し、奈良～平安前期の整然とした配置をなす掘立柱建物群が検出されている。七尾湾に面した沿岸部では、入り江際で斎串、人形、人面墨書土器等多数の祭祀具や獣骨が出土し、官衙関連の祓所とされる小島西遺跡(97)がある。

【中世以降】鎌倉時代以降、市内府中には国衙がおかれ守護所もここにあって能登支配の拠点となった。中世遺跡の発掘事例は少ない。その中で、古府・国分遺跡や八幡大水口遺跡では古代に引き続き室町時代にかけての遺構群が確認され、開発領主層の所在が推定されている。細口源田山遺跡では14世紀末～16世紀初頭の土葬墓54基、火葬墓約80基や村堂とみられる施設が確認され室町期の農民村落を知る貴重な資料となっている。小島西遺跡では室町から近世にかけての道路遺構や町屋が確認され、現在にいたる港町七尾の町並みの一端が知られた。16世紀前半、能登守護畠山氏は調査地東方の石動山系尾根上(標高約300m)に七尾城を築くとともに守護所も移し、現在の古城町、古屋敷町周辺に新たな城下町が形成される。この山麓の城下町遺跡については七尾市教委や県埋文センターにより広範囲に発掘調査が実施され、府中と七尾城を結ぶ大手道を中心に整然とした町割りがなされ、武家屋敷や寺院、町屋などが軒を連ねた様子が明らかとなっている。その後、天正9(1540)年、能登国を拝領した前田利常は当初七尾城に入城するもこれを廃城とし、港に面し利便な所口の小丸山城(32)を築き領内支配の中心地とする。元和2(1616)年の一国一城令により廃城となるがその石垣・堀切等は残り、現在は小丸山城址公園として整備されている。



第4図 古府タブノキダ遺跡周辺の遺跡

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	月夜見神社古墳群	古墳	26	岩屋十三塚遺跡	中世	51	千野高塚遺跡	弥生	76	万行首塚	不詳
2	下町中世墓遺跡	中世	27	南藤橋七高遺跡	弥生	52	千野高塚1号墳	古墳	77	万行谷内遺跡	縄文
3	下町横穴群	古墳	28	西藤橋遺跡	不詳	53	千野高塚2号墳	古墳	78	矢田高塚古墳	古墳
4	八幡昔谷遺跡	古代・中世	29	榎物町遺跡	中世	54	千野正福寺遺跡	縄文	79	矢田丸山古墳	古墳
5	八幡八幡神社古墳群	古墳	30	小丸山公園下遺跡	不詳	55	千野遺跡	弥生・古墳	80	矢田祭跡	近世
6	八幡経塚	中世	31	小丸山遺跡	古墳	56	能登国分寺跡附建物群跡	古代	81	矢田明星館遺跡	古代
7	八幡塔地面遺跡	不詳	32	小丸山城跡	中世・近世	57	古府・国分遺跡	古代・中世	82	大和遺跡	縄文
8	細口源田山遺跡	弥生・中世	33	小島遺跡	古墳	58	古府タブノキダ遺跡	古墳・古代	83	矢田遺跡	弥生
9	細口遺跡	古墳	34	小島田七商高遺跡	古墳	59	古府十三塚遺跡	中世	84	矢田高木森古墳	古墳
10	細口B遺跡	中世	35	小島六十筋遺跡	弥生	60	古府廃寺	古代	85	矢田高木森遺跡	弥生
11	細口古墳群	古墳	36	藤橋古墳	古墳	61	古府総社遺跡	古代	86	七尾軍艦所跡	近世
12	国分山遺跡	弥生	37	藤橋十三塚遺跡	中世	62	七尾城跡	古代・中世	87	万行御政所遺跡	中世
13	国分火司神社古墳群	古墳	38	小島十三塚遺跡	近世	63	七尾城跡(古府谷内地区)	古代	88	万行経塚	近世
14	国分尼塚1号墳	古墳	39	小島池底遺跡	縄文	64	七尾城跡(古城の池地区)	中世	89	万行赤岩山遺跡	縄文
15	国分尼塚2号墳	古墳	40	赤浦大制遺跡	古墳	65	七尾城跡(古屋敷地区)	中世	90	万行遺跡	弥生・古墳
16	国分尼塚遺跡	縄文・弥生	41	中狭角田遺跡	古墳	66	七尾城跡(古城大念寺屋敷地区)	中世	91	小島西遺跡	縄文・古墳・近世
17	国分高井A遺跡	古墳	42	国下遺跡	古代	67	七尾城跡(シッケ地区)	近世	92	栄町遺跡	古墳・古代
18	国分高井B遺跡	縄文	43	八田椿森遺跡	中世	68	後島東之御塚古墳	古墳	93	国分遺跡	弥生・中世
19	国分高井山古墳群	古墳	44	千野A遺跡	不詳	69	後島西之御塚古墳	古墳	94	国分B遺跡	古墳
20	国分高井山遺跡	弥生	45	国下柳田遺跡	古代	70	藤野遺跡	弥生	95	千野野田遺跡	古墳・古代
21	国分願山遺跡	弥生	46	八田梨ノ木遺跡	縄文	71	矢田大門遺跡	縄文	96	八幡大掛口遺跡	古代・中世
22	岩屋遺跡	古墳	47	国下縄文遺跡	縄文	72	矢田天神川原遺跡	古代	97	矢田神社東遺跡	古墳
23	岩屋A遺跡	不詳	48	千野1号墳	古墳	73	矢田天神川原B遺跡	古墳	98	御蔵町遺跡	中世
24	国分岩屋山1～12号墳	古墳	49	千野廃寺	古代	74	矢田中瀬5号墳	古墳	99	七尾城跡小池川原地点	古墳・古代
25	藤橋遺跡	古代・中世	50	千野大聖寺平遺跡	古代	75	矢田天満宮古墳	古墳		古府ヒノナンデンニシ遺跡	古代

第2表 周辺の遺跡一覧表

第3章 調査の結果

第1節 概要 (第1・2・5図)

(1) 既往の調査 古府タブノキダ遺跡は昭和57年、旧県立七尾工業高校第2体育館建設に際し1,000㎡を対象に発掘調査が実施されている(垣田^{ほか}1983)。調査では、7世紀後半～8世紀後半にかけて4期以上の建て替えがなされた、のべ15棟以上の掘立柱建物が確認された。8世紀後半頃には片庇を持つ6×2間の大型建物も存在し、古代能登国の中枢域にあって、養老2(718)年の越前国からの能登国分立前～天平13(741)年の越前国への併合、そして天平勝宝9(757)年の再立国に前後する時期の官衙、官衙関連施設あるいは有力豪族の居宅等の可能性が指摘されている。

(2) 調査の概要 調査地は昭和57年度調査地の南方約45m。台地端に沿った調査区は幅約10m、延長約95mの範囲であり、調査前は杉林となっていた。古府タブノキダ遺跡南端にあたり、その南側は過去の道路工事等により削平され比高差約13mの急崖となっている。周辺の地表標高は50～43m。北東部を最高所とし南および西に下る。B区、C区北東半部は比較的緩傾斜域、A区、C区南西部は斜面である。遺構はB・C区北東半部に分布し、竪穴建物4棟、掘立柱建物1棟、土坑4基、溝2条、小穴を確認した。他の箇所では遺物は散発的に出土するものの遺構は認められなかった。出土遺物は土師器、須恵器を主にコンテナにして3箱である。

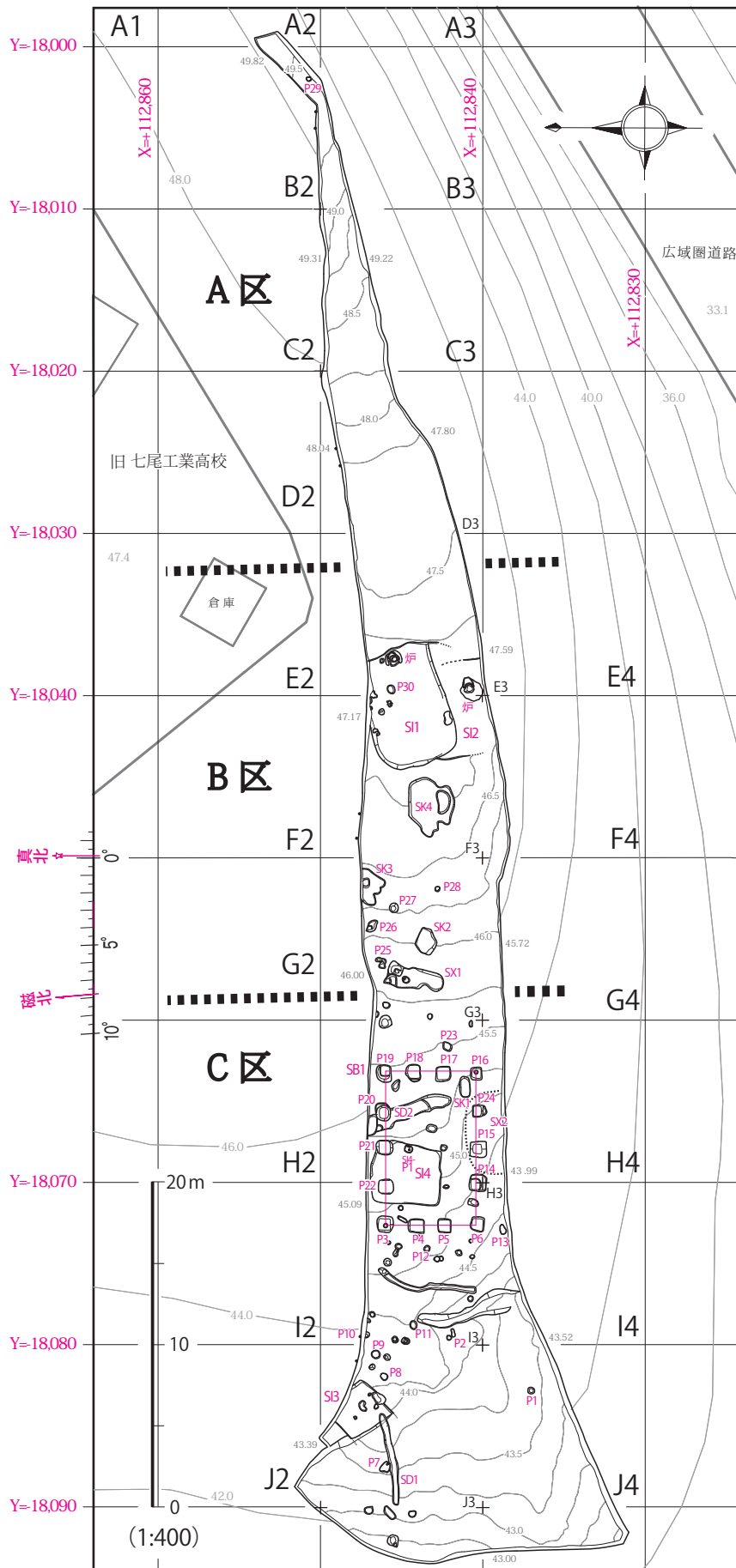
(3) 調査区割り 調査区全体には平面直角座標第Ⅶ系(世界測地系)に合わせた一辺10mの格子をかけ、北東隅を起点に東西帯にアルファベットを南北帯にはアラビア数字を振り、これを組み合わせ区画名とした。また、東西に細長い調査区は排土先等の都合から3区に大別、東からA・B・C区と呼称し順に調査を進めた。なお、昭和57年度調査では磁北により報告していることから、対照のため第5図に磁北および真北ラインを示した。これによると調査地での磁北は座標北より7.8°西偏する。

(4) 堆積土壌 第5図右に調査区北壁の断面土層図を示した。その堆積土壌は、1層:[表土]暗褐～褐色砂質土、2層:東部では褐色シルト質土、西部ではにぶい黄褐色粘質土、3層:黄褐～褐色シルト質土、4層:褐～黄褐色シルト・シルト質土、地山土は明黄褐色粘質土であり、遺構覆土は3あるいは4層が多い。1～4層で厚さ30～40cmである。S I 2は表土直下で検出され、S I 3は南半部が削平されるなど、調査地一帯は全般に削平や土砂流失等の地形改変を被ることが考慮される。

第2節 検出遺構・遺物

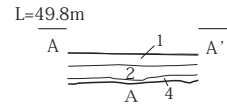
(1) 竪穴建物

S I 1(第5・6・8・9・13図) B区東側に位置する。東西7.5m、南北5.0mと東西に長い隅丸長方形プランをなし、深さ26cm。西辺でN-18°-Wを向く。覆土は地山土近似の淡褐色あるいは褐色土が多い。南部にはS I 2が重なる。土層断面では把握できなかったが、S I 1がより深く、また、面的掘り下げの際にS I 1範囲に褐色土が分布したことから、S I 1はS I 2に後出するものとみる。内部で4個の小ピットを確認した。床面には強被熱により焼結した部分が4箇所存在した。被熱は床下5cmに及び、その表面は還元気味の黄色を呈する。竪穴南西部の最も大きい被熱部は長さ80cm、幅50cmを測る。また、竪穴東壁に接して地床炉が存在した。炉上部は遺存せず、その上面には崩壊した炉体らしき粘土塊を含む層が堆積していた。炉体は地面を掘りくぼめ構築したもので、還元気味の黄

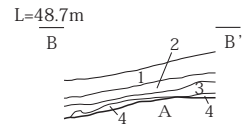


【調査区北壁断面土層】

【断面A】



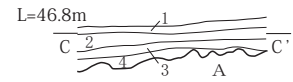
【断面B】



(断面A・B注記)

- 1 【表土】 暗褐色砂質土
(粘性なし、しまり甘い)
- 2 褐色シルト質土
(粘性なし、固くしまる)
- 3 褐色シルト質土
(粘性弱、固くしまる)
- 4 にぶい黄褐～褐色シルト
(粘性弱、しまる)
- A 【地山土】 明褐色粘質土

【断面C】

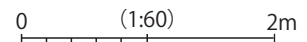


【断面D】

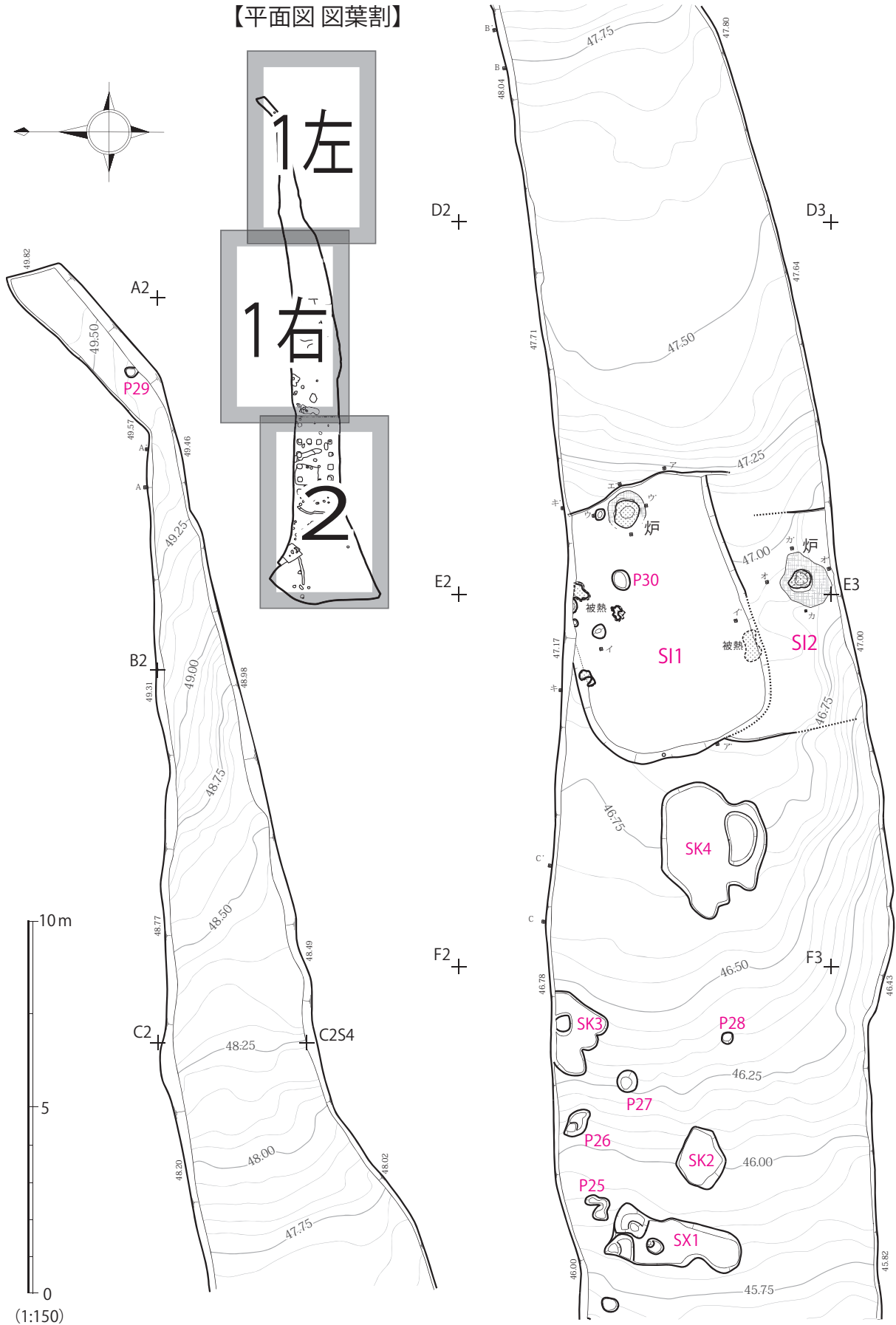


(断面C・D注記)

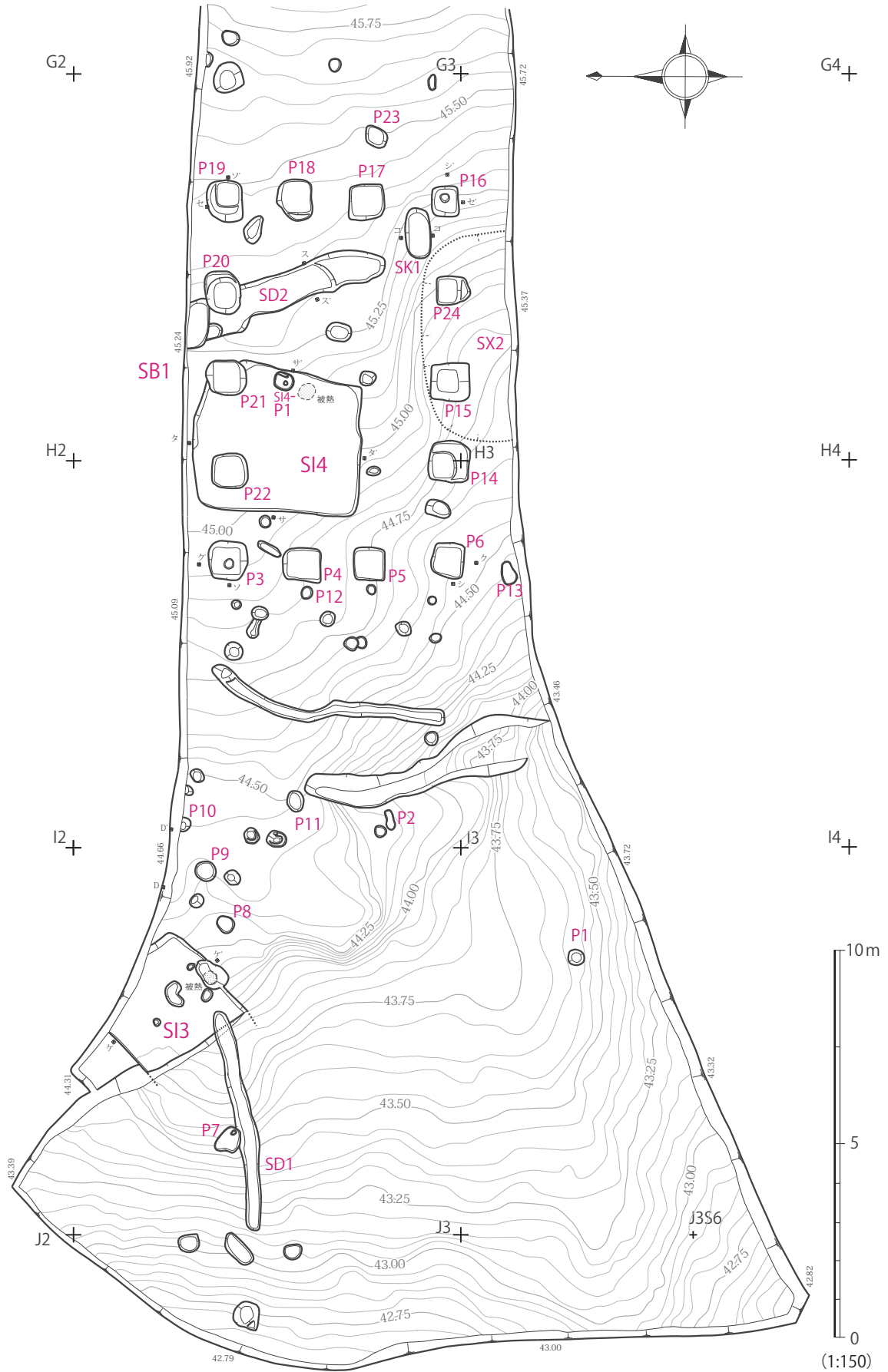
- 1 【表土】 褐色砂質土
(粘性なし、固くしまる)
- 2 にぶい黄褐色粘質土 (粘性なし、
固くしまる、炭化物少量)
- 3 黄褐色シルト質土
(しまり甘い)
- 4 濁黄褐色シルト質土
(しまり甘い)
- A 【地山土】 明褐色粘質土



第5図 調査区全体図・調査区北壁土層断面図

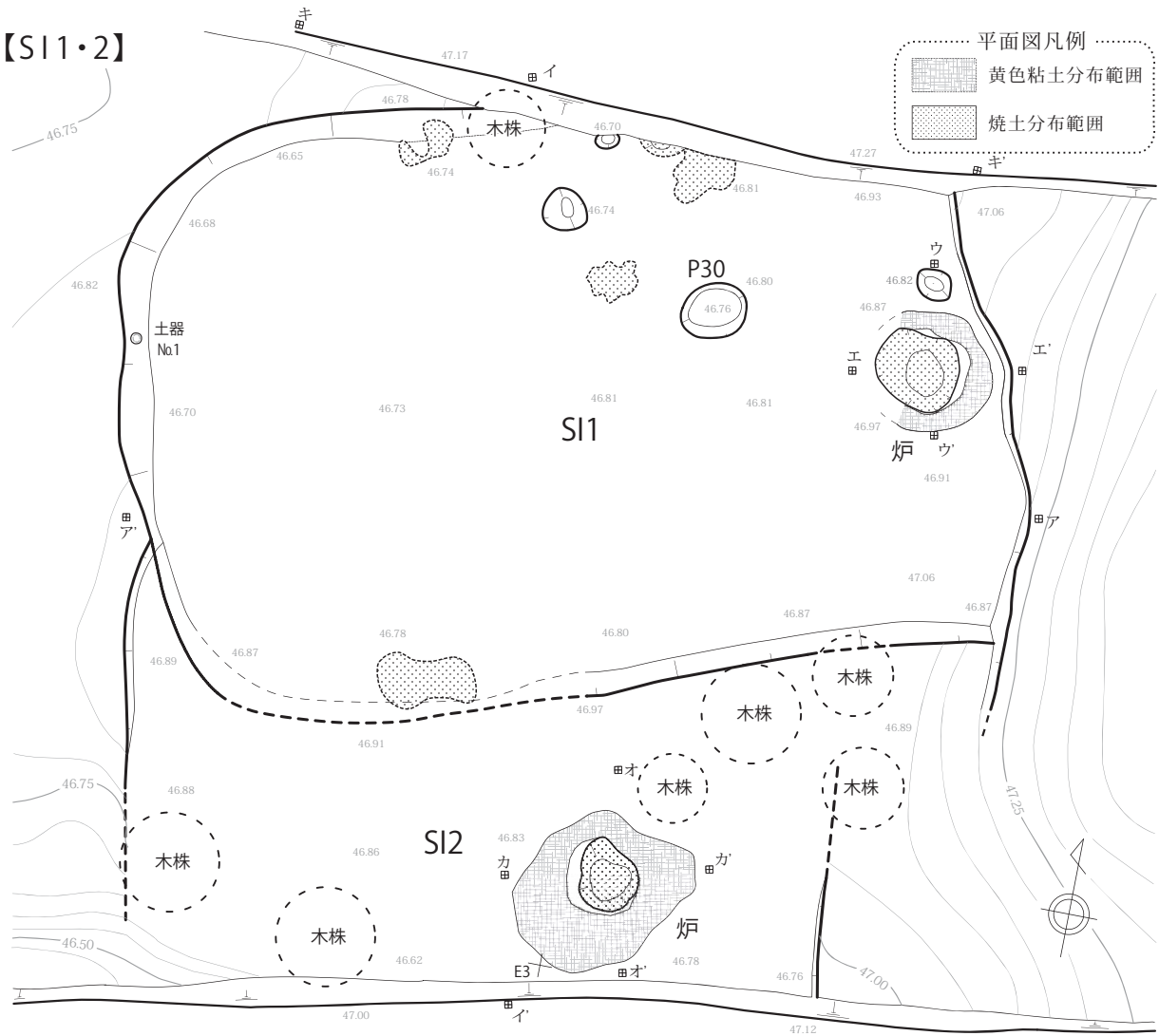


第6図 調査区平面図1

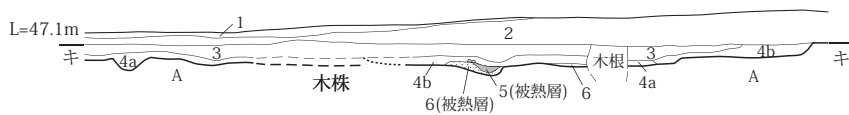


第7図 調査区平面図2

【S11・2】

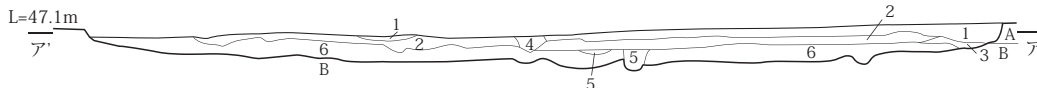


S11・調査区北壁

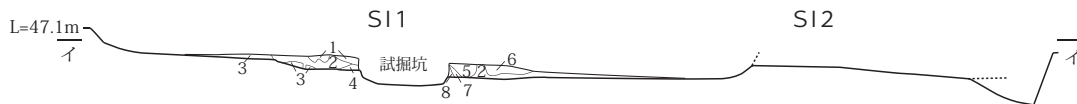


- 1 【表土】 腐食土
- 2 淡灰黄色シルト質土
- 3 淡褐色シルト質土
- 4a 淡灰黄色粘質土 (3層ブロック含)
- 4b 淡灰黄色粘質土 (3層ブロック少量含)
- 5 焼土層 (上位は強被熱し黄味がかかる)
- 6 焼土層 (黄褐色粘質土ブロック少量含)
- A 【地山土】 淡黄褐色粘質土

S11

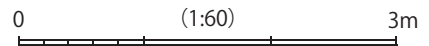


- 1 にぶい黄褐色土 (粘性なし、固くしまる、炭化物ごく少量含)
- 2 灰黄褐〜にぶい黄褐色土 (粘性なし、固くしまる、炭化物ごく少量含)
- 3 褐色土 (粘性なし、しまる)
- 4 【木根】 暗褐色土
- 5 灰褐色粘質土 (固くしまる)
- 6 褐色粘質土 (固くしまる)
- A 【地山土】 暗黄褐色粘質土
- B 【地山土】 淡赤褐色粘質土

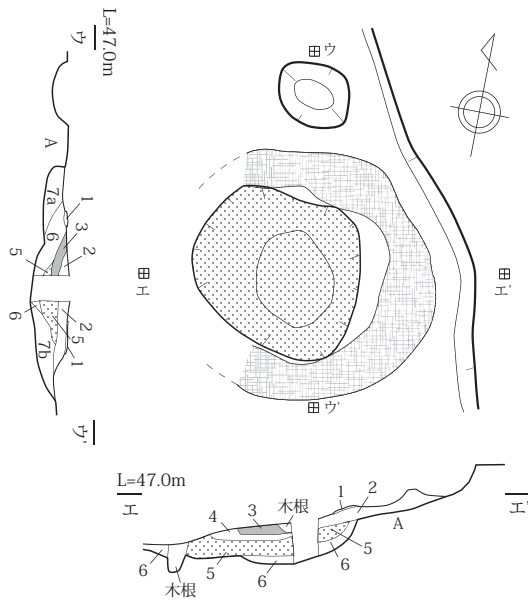


- 1 にぶい黄褐色土 (粘性なし、固くしまる、炭化物ごく少量含)
- 2 灰黄褐〜にぶい黄褐色土 (粘性なし、固くしまる、炭化物ごく少量含)
- 3 にぶい黄褐〜黄褐色土 (粘性なし、固くしまる)
- 4 暗褐色土 (粘性なし、固くしまる、植物少量含む、炭化物ごく少量含)
- 5 黒〜黒褐色土 (粘性なし、固くしまる、小礫、植物ごく少量含)
- 6 灰黄褐〜にぶい黄褐色土 (粘性なし、固くしまる、炭化物ごく少量・土器片ごく少量含)
- 7 暗褐色土 (粘性なし、固くしまる)
- 8 黒褐〜暗褐 (粘性なし、固くしまる)

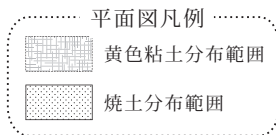
第8図 S11・2



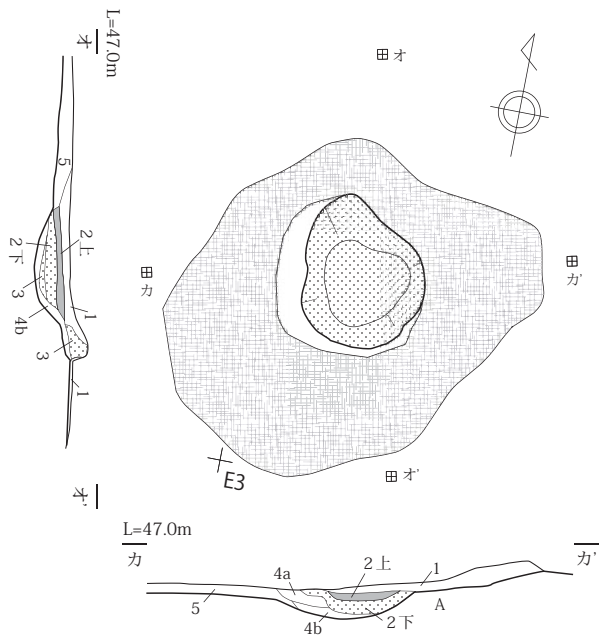
【SI 1 炉】



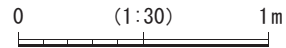
- 1 濁灰黄色土 (炉壁?、硬質)
- 2 褐色砂質土 (1~2cm大焼土粒少し含、しまる)
- 3 濁黄色焼土 (強被熱により還元硬質)
- 4 褐色砂質土 (1~2cm大焼土粒多く含、しまりやや甘い)
- 5 濁赤色焼土
- 6 黄褐色粘質土 (しまり甘い、5mm~1cm大焼土粒少し含)
- 7a 淡黄褐色粘質土 (よくしまる)
- 7b 淡黄褐色粘質土 (よくしまる、濁黄色土ブロック含)
- A 【地山土】黄褐色粘質土



【SI 2 炉】



- 1 褐色砂質土 (5mm大焼土粒少し含)
- 2上 濁黄色焼土 (強被熱により還元硬質)
- 2下 赤褐色焼土 (粘性あり)
- 3 赤褐色焼土 (2下層より色淡い)
- 4a 褐色粘質土 (5mm~2cm大焼土粒多く含)
- 4b 褐色粘質土 (5mm~2cm大焼土粒少し含、しまり甘い)
- 5 灰褐色粘質土
- A 【地山土】黄褐色粘質土

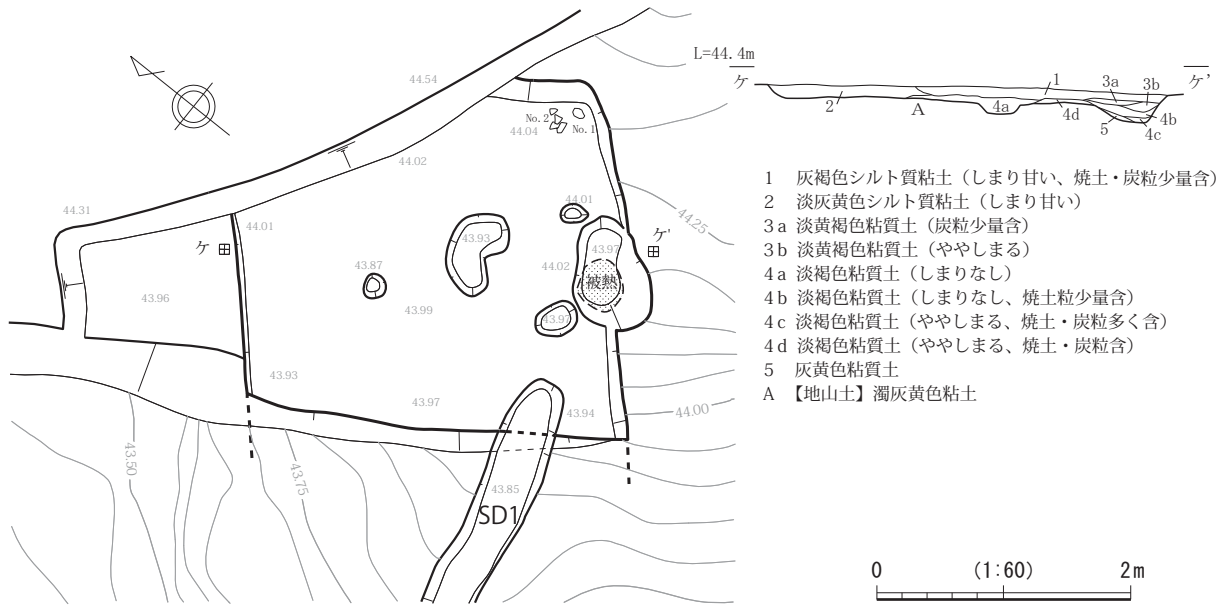


第9図 SI 1・2 炉

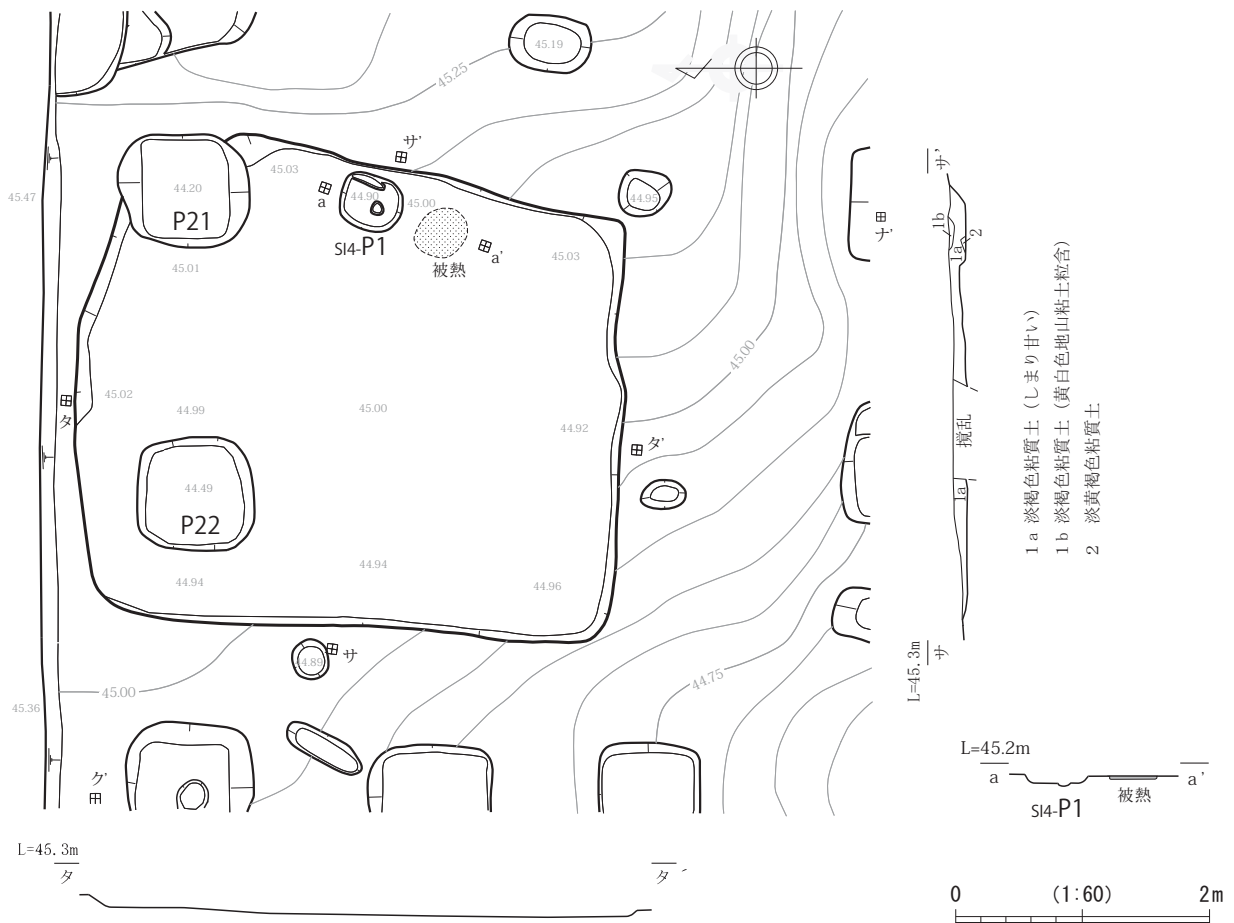
色被熱範囲からみて、外径1.0 m、内径80cmでやや不整な円形をなす。東側で3 cmほどの高さで遺存した炉壁は青灰色を呈し2・3 cmほど内部まで被熱が及ぶ。炉体底部上面は部分的に還元し黄~青灰色を呈し、被熱は底面下10cmまで及ぶ。内外に灰・炭層は存在せず、ほかに貼り床等顕著な施設も認められなかった。出土遺物は第13図1~12を図化した。2・4~7・11は竪穴西壁に接する第8図土器No.1 周囲で近接して出土した。10は炉上面からの出土である。1の土師器壺は淡橙色の精良な胎土で薄い器壁をもつ。2の須恵器蓋は扁平なつまみを付し、内面にヘラ記号「×」を加える。須恵器坯身4~7はそれぞれ口径8.6cm、9.2cm、9.8cm、10.8cmと小振りである。非ロクロ製品の6は厚い器肉を持ち、焼成不良で灰白色を呈する。須恵器鉢の10は口縁部内面に2条の沈線を巡らせ、底部外面にケズリを加える。鉄製刀子12は竪穴覆土上部より出土したものである。小柄の須恵器坯からみて本建物は田嶋編年I₂新~II₁期に位置づけられる。2・3はIII期に、8はVI₁期に位置付けられ、流入品であろう。

SI 2 (第5・6・8・9図) 北はSI 1に切られ、南側は削平され現状は急崖である。東西幅は5.8 m程度、西辺でN-11° -Wを向く。方形あるいは長方形をなすとみられるが、深さ5 cm程度とごく浅いことや木株による攪乱が多いことから示した形状に不安が残る。東壁寄りではSI 1と同様の炉を確認した。炉体は地面を掘りくぼめ構築したもので、還元気味の黄色被熱範囲からみて、外径は長辺1.5m、

【S13】

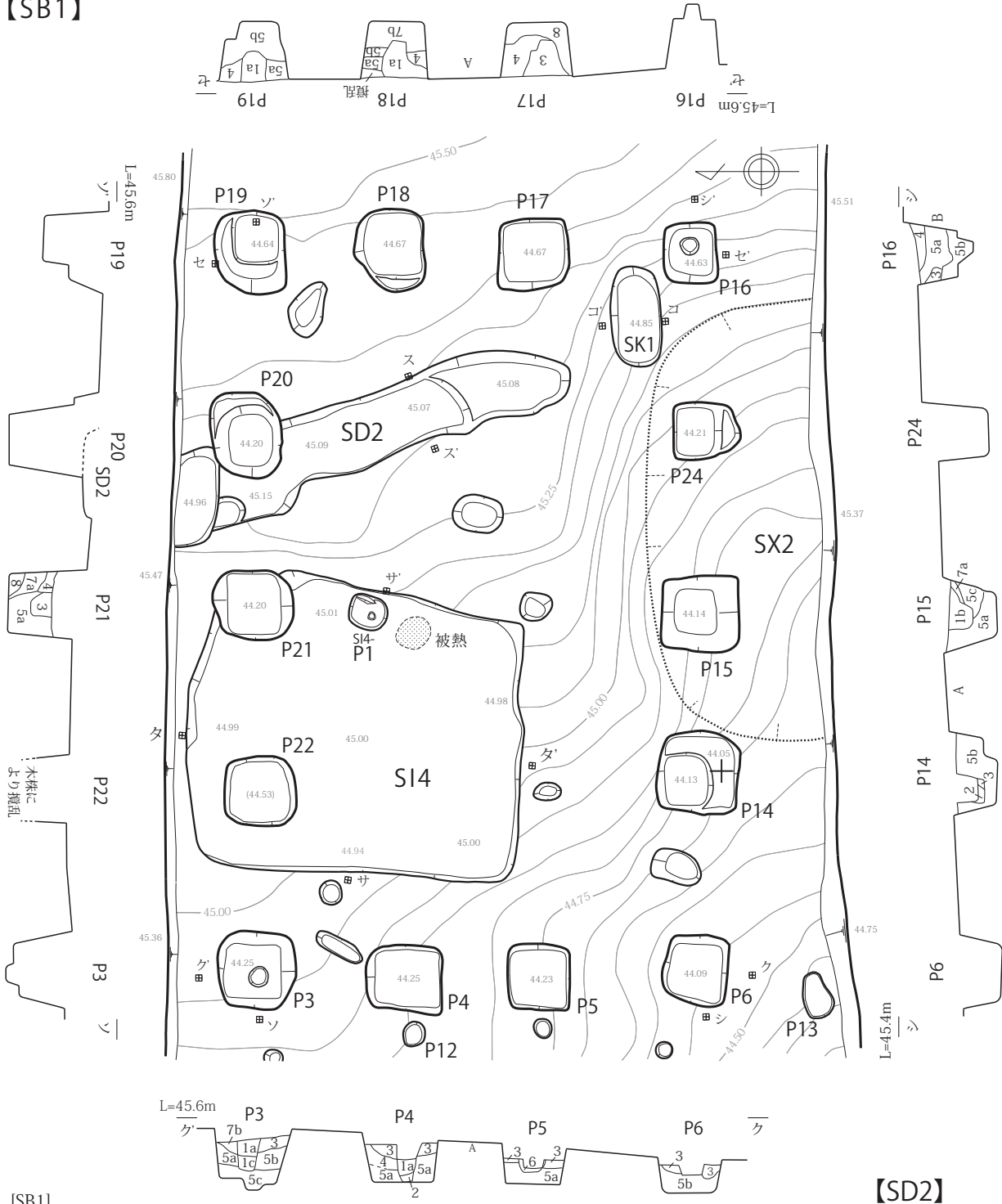


【S14】



第10図 S13・4

【SB1】



【SB1】

- 1a 褐色粘質土（しまり甘い）
- 1b 褐色粘質土（しまり甘い、黄白色粘質土ブロック混）
- 1c 褐色粘質土（しまり甘い、黄白色粘質土ブロック混多く含）
- 2 暗褐色粘質土（しまり甘い）
- 3 黄褐色粘質土（しまりあり）
- 4 淡黄褐色粘質土（しまりあり）
- 5a 灰褐色粘質土（しまり甘い）
- 5b 灰褐色粘質土（5a層より色淡い、しまり甘い）
- 5c 灰褐色粘質土（しまり甘い、黄褐色粘質土ブロック含）

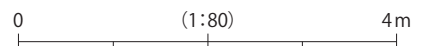
- 6 黄白色粘質土（褐色粘質土ブロック少し含、しまり甘い）
- 7a 黄褐色粘質土
- 7b 黄褐色粘質土（褐色粘質土ブロック含）
- 8 暗褐色粘質土（しまり甘い）
- A 【地山土】黄褐色粘土（しまりあり）
- B 【地山土】黄褐色粘土（しまりあり、5mm～2cm礫少量含）

【SD2】

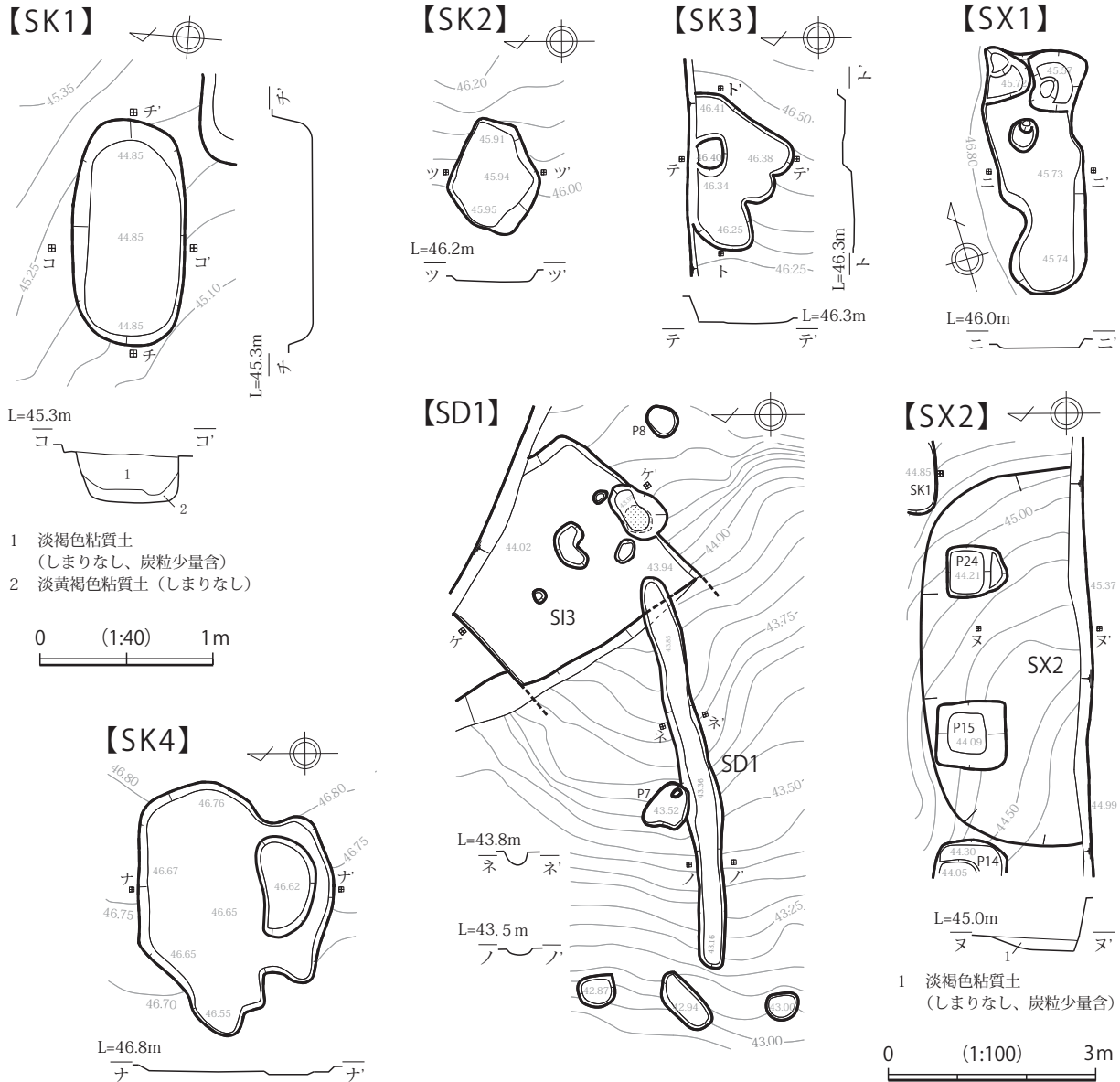
L=45.3m



- 1 褐色シルト質土（粘性弱、しまり甘い）
- 2 黄褐色シルト質土（粘性弱、しまりやや甘い）



第11図 SI4、SB1、SD2

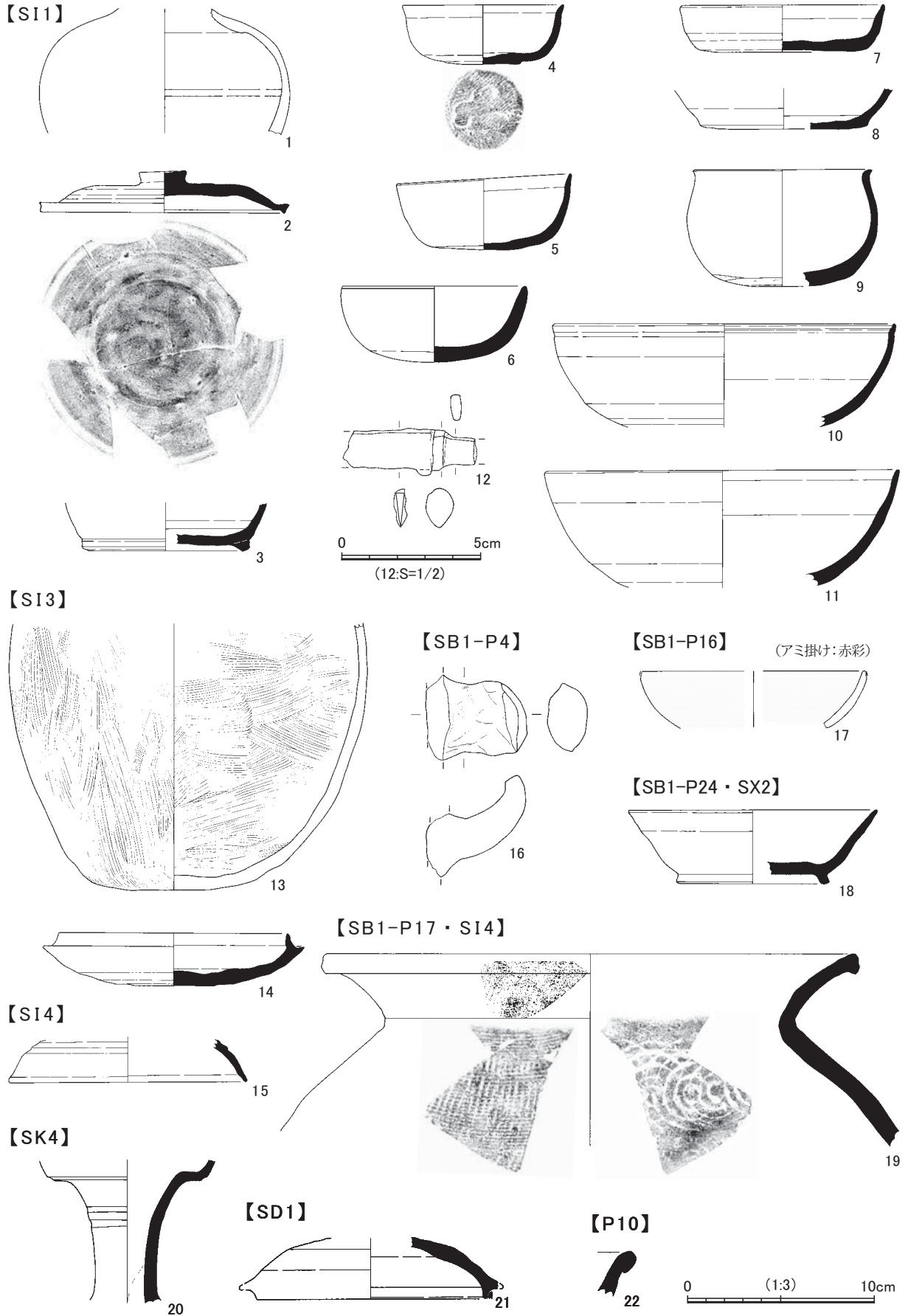


第12図 SK、SD、SX (縮尺 SK1 : 1/40、その他: 1/100)

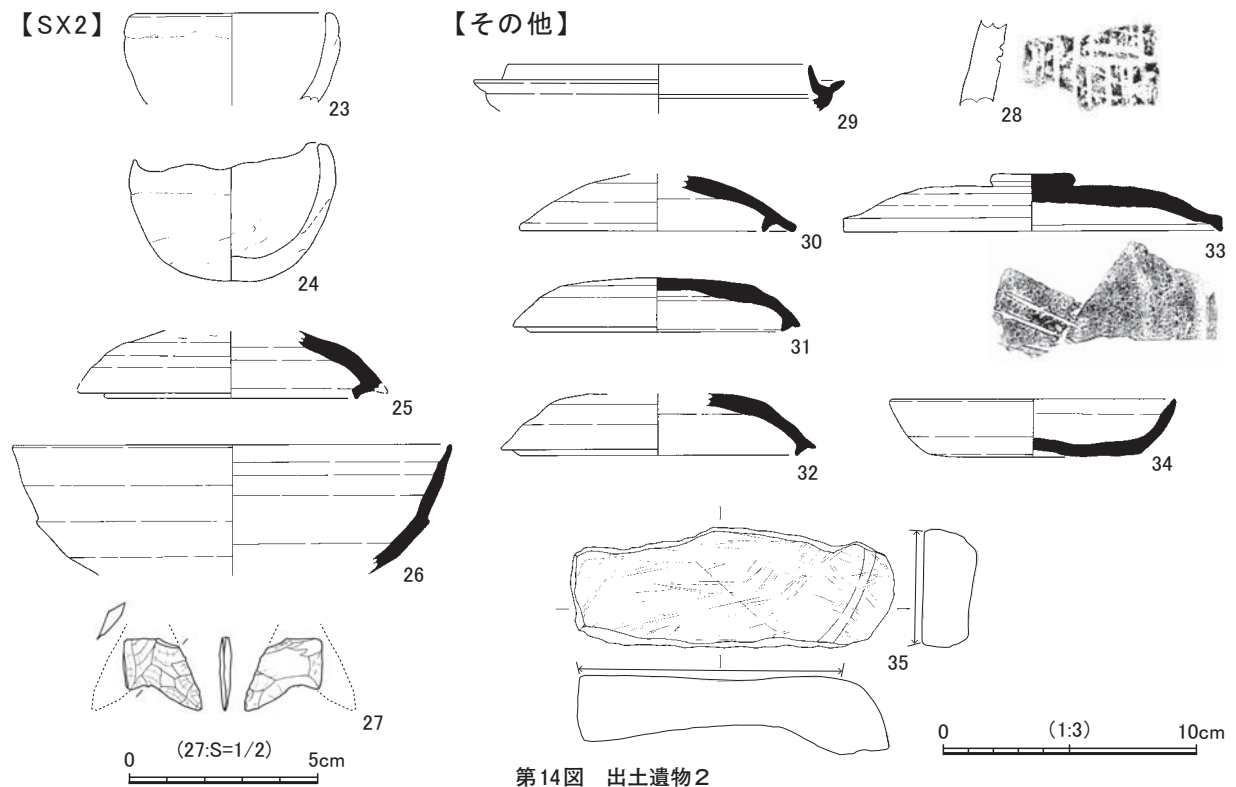
短辺1.2mの不整長円形を呈し、内径は約60cmを測る。炉内部の被熱状況はS I 1と同様で、内外に灰・炭層は存在せず、ほかに貼り床等顕著な施設も確認されなかった。伴出遺物はない。

S I 3 (第5・7・10・13図) C区西端に位置し、上位にはSD 1が存在する。南西部は削平され、東西幅3.1m、隅丸の方形あるいは長方形プランを呈し、深さ15cm。西辺でN-46° -Eを向く。床面では建物南東壁中程に接し長径88cm、短径62cm、深さ5cmのピットが存在し、その上面に直径約25cm、厚さ約3cmの被熱層が存在した。その他、床面では不定形の小ピットを4個を確認したほかは貼り床等顕著な施設は確認されなかった。東隅壁際で第13図13(取り上げNo.1・2)の非ロクロ土師器長胴甕体部が出土した。極薄手で外面は縦位に、内面には横位のハケメ調整を加え、平坦気味の底部を持つ。扁平な器形をなす14の須恵器坏身は口径12.2cm、I₂期頃の所産であろうか。ほか土師器甕細片多数と須恵器甕片少量が出土している。

S I 4 (第5・7・10・13図) C区東側でSB 1に重複する。SB 1柱穴P 21・22に切られており、SB 1に先行する建物である。南北4.3m、東西3.6mと南北にやや長い長方形プランを呈し、深さ10cm。



第13図 出土遺物1



西辺でN-4° -Eを向く。東辺に接し一辺約50cm、深さ10cmのP 1、その南に接し直径55cm、厚さ5cmの被熱部が存在する。貼り床等顕著な施設は確認されたかった。15の高杯蓋の他、土師器甕細片が多数出土している。

(2) 掘立柱建物

SB 1 (第5・7・11・13図) C区東側に位置し、S I 4、SD 2に重複しこれより新しい。南東隅に位置するSK 1との先後関係は不明である。現状は南および西に緩く下る傾斜地で旧地形は削平ないし流失を被るとみられる。梁行がほぼ真北を向く、桁行4間(9.42m)、梁行3間(5.52m)の側柱建物である。柱掘方は方形を呈し一辺80cm前後のものが多い。掘方深度については比較的平坦な東辺でみると深さ70cm前後、最も深い北辺のP 20は1.1mを測る。西辺の柱穴では柱痕跡とみられる土層が比較的観察され、これによると1・6層を覆土とし、直径30cm程度の円形を呈する。堀方埋土はしまりの甘い5層を主とするものが多い。遺物は16(P 4)の鍋等の把手、17(P 16底)は内・外面赤彩の土師器碗、18(P 24、S X 2出土品と接合)の焼成不良の須恵器有台杯のほか、P 5・6・11・14・15・17・19・21・22・24から、比較的多くの土師器甕細片と少量の須恵器片が出土している。18はⅡ₃期の所産であり、本建物は該期に位置づけられよう。

(3) 土 坑

SK 1 (第5・7・11・12図) SB 1に重複する。先後は不明。隅丸長方形を呈し、長辺1.3m、短辺62cm、断面逆台形をなし、深さ33cmを測る。土師器甕片10点、須恵器片3点出土。時期・性格不明。

SK 2~4 (第5・6・12・13図) B区西側に分布する深さ10~15cmの浅い不定形窪み。土師器・須恵器片が出土し番号を付したが、自然の窪みの可能性がある。20はSK 4出土の須恵器甕である。

(4) 溝

SD 1 (第5・7・12・13図) C区西端の斜面に位置し、北側はS I 3を切り込む。長さ5.5m、幅50cm、深さ10cm弱を測る。性格不明。21はⅡ₁期の須恵器坏蓋であり、口縁に坏口縁部が溶着する。土師器・須恵器甕片が少量出土している。

SD2 (第5・7・11図) C区南側に位置し、SB1に重複する。SB1柱穴P20に切られており、SB1に先行する。北は調査区外に伸び長さ5.3m以上、深さ20cm前後。出土遺物なし。性格不明。

(5) SX、その他

SX1 (第5・6・12図) 調査区中程、B区西側に分布する長径3.4m、短径1.2m、深さ10cmの浅く不定形な窪み。土師器・須恵器片が出土し番号を付したが、自然の窪みの可能性が高い。

SX2 (第5・7・12・14図) C区南側で調査区南壁に接する。SX2南側は急崖だが以前は南に下る緩斜面であり、SX2はこの斜面上部の南北5.2m、東西2.2mに分布する褐色土の範囲を呼称した。調査区壁際で深さ20cm程度。土師器甕片多数、須恵器細片5点と比較的遺物を含んだことから番号を振ったものだが、傾斜地上の鞍部の可能性が高い。23・24は同様の作りを持つ手捏ねの土師器椀。輪積み痕を残し口縁や器体はゆがむ。25の須恵器坏蓋はⅡ₁期に位置付けられる。26は外面中位に稜を持つ無蓋高杯、27はガラス質安山岩製の大型の石鏃である。

ピット 遺物を出土したものに番号を付した。細片が多く図化に耐えるものはない。

包含層 B区を主に土師器甕や須恵器甕・坏片などがコンテナ2箱弱出土している。28は中期前葉新崎式の縄文土器深鉢。29～34は須恵器。29の坏身はⅠ₁期、30～32の坏蓋はⅡ期、33の坏蓋はⅢ期、34の皿はⅤ期に位置付けられる。35は凝灰岩または砂岩製の砥石である。砥石面には鋭い条線が残り金属研磨に使用したとみられる。自然面は砥石面のみで他は破断面だが、各面の風化・摩耗度が大きいことからみて使用時の形状を保つ完形品とみられる。手頃な礫片を用いたのであろうか。

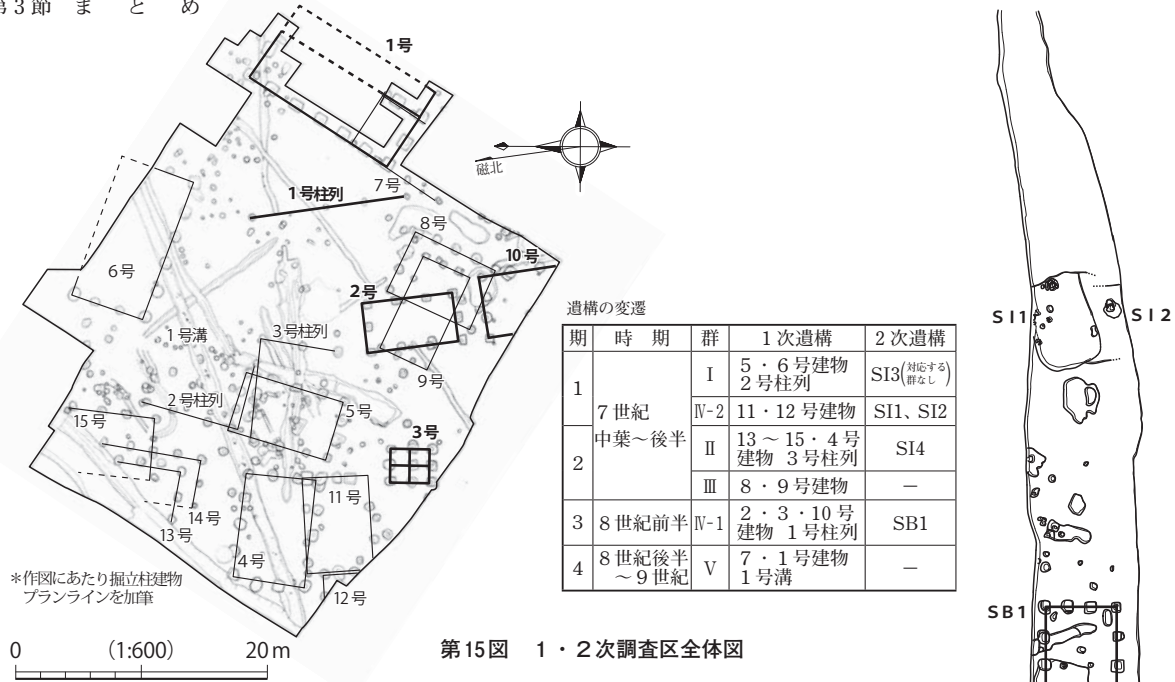
図化コード	地区	種類	口径(cm)	器高(cm)	器底径(cm)	重量(g)	図化コード	地区	種類	口径(cm)	器高(cm)	器底径(cm)	重量(g)	図化コード	地区	種類	口径(cm)	器高(cm)	器底径(cm)	重量(g)	図化コード	地区	種類	口径(cm)	器高(cm)	器底径(cm)	重量(g)				
1	B区	土師器				(6.6)	10	B区	須恵器	18.2			(5.5)	19	C区	須恵器	27.3			(10.2)	27	C区	石製品	長(1.8)、厚0.4							
D4	SI1-a	壺					D8	SI1 炉1	鉢					D27	SBI-P17/S14	甕						石1	SX2	石鏃	幅(2.0)、重量(1.2)						
2	B区/B4区	須恵器	13.0	2.3			11	B区	須恵器	18.8			(6.2)	20	B区	須恵器					(7.6)	28	A区	縄文土器	幅(2.0)、重量(2.3)						
D1	SI1西壁/SI1	坏蓋					D2	SI1 鉢	鉢					D19	SK4	甕						D5		深鉢							
3	B3区	須恵器				(2.6)	12	B区	金属製品	長(4.8)、重量(5.6)				21	C区	須恵器	12.3	3.2				29	A区	須恵器		12		(1.6)			
D21	SI1	有台坏	8.2				金1	SI1 No.58	刀子	刃部幅1.2、厚2.8				D18	SD1	坏蓋	8.9					D35	表土	坏身							
4	B区	須恵器	8.6	3.2			13	C区	土師器				(14.3)	D28	P10	甕 or 壺					30	B区	須恵器		8.4		(2.2)				
D10	SI1 西壁	無台坏	4.0				D11	SI3/SI3No.2	甕	8.7				22	C区	須恵器				(2.4)		D24		坏蓋							
5	B区	須恵器	9.2	4.1			14	C区	須恵器	12.2	2.8			D28	P10	甕 or 壺					31	B区	須恵器		10		(2.1)				
D6	SI1No.1	無台坏	5.8				D13	SI3	坏身	4.4				23	C区	土師器	8			(3.5)		D22		坏蓋		7.6					
6	B区	須恵器	10	4			15	C区	須恵器	12.8	(2.4)			D30	SX2	椀					32	B3区	須恵器		10.9		(2.4)				
D7	SI1No.1 脇	無台杯	6.4				D12	SI4	高杯蓋					24	C区	土師器	7	5.5				D25		坏蓋		5.6					
7	B区	須恵器	10.8	2.5			16	C区	土師器				(5.5)	D14	SX2	椀	3.6				33	B4区	須恵器		14.8		2.2				
D9	SI1 西壁	無台坏	8.0				D16	SBI-P4 扉方内(把手)						25	C区	須恵器	9.8	(2.6)				D31		坏蓋							
8	B区	須恵器				(2.2)	17	C区	土師器	(11.9)	(3.1)			D29	SX2	坏蓋					34	B区	須恵器		11.2		2.3				
D20	SI1	無台坏	9.0				D26	SBI-P16 扉ピット	椀					26	C区	須恵器	17.2	(5.1)				D23		皿		8.4					
9	B区	須恵器	9.5	6.2			18	C区	須恵器	13.1	3.9			D15	SX2	高坏					35	B3区	石製品	長4.7、厚3.1							
D3	SI1	小型鉢					D17	SBI-P24/SX2	有台坏	8.1											石2		砥石	幅12.8、重量240							

第3表 出土遺物観察表

第3節 まとめ

古府タブノキダ遺跡では、昭和57年に今回調査地北方約45mの地点で1,000㎡の発掘調査(以下、1次調査、今回調査は2次調査と記述)が実施されており、調査結果から国衙・郡衙等の官衙か官衙関連施設あるいは有力豪族の居宅等の位置付けがなされている。その報告(垣田^{ほか}1983)では、検出した15棟以上の掘立柱建物や柱列を軸方位や切り合いにより5群に分け、遺物を伴う1号溝との関係等を手がかりに7世紀後半～8世紀後半にかけて1～4期にわたる変遷が示されている。第15図に1・2次調査区を合成したが、ここでは1次報文に2次調査結果を重ね遺構変遷案を示すことでまとめとした。その中では期・群分けは1次報文に依り、時期については新知見を加味したい。また、遺跡の評価についてここで新たに所見をあげる余力はなく、代わりに若干の資料を提示することで今後の遺跡理解の一助としたい。

初現 7世紀代1四半期の29(表土中出土)であり、1次調査でも該期の資料が数点出土している。遺構は確認されていない。



第15図 1・2次調査区全体図

1・2期 4基の竪穴建物は1・2期におかれる。SI3が7世紀中葉～第3四半期に、SI1は7世紀代三四半期に、SB1に先出するSI4は1ないし2期に位置付けられる。SI1に先出するSI2は遺物を伴わないが軸方位からみてそう遡ることのない時期の所産とみたい。これら竪穴建物は内部に炉(SI1・2)や被熱部(SI3・4)を伴うことから何らかの工房跡と考えられ、初期段階において手工業生産域が併置されていたことが知られた。軸方位の対比ではSI1・2は1期IV-2群に、SI4は2期II群に同じくし、SI3は合致する建物はない。

3期 台地南縁に位置する4×3間の東西棟SB1(床面積52㎡)は3期におかれる。1点だが柱穴から8世紀第1四半期の須恵器有台坏18を出土した。1次IV-1群の建物とともに、方形掘方をもち南北に軸を合わせた(3号建物は若干東に振り柱掘方形状も不揃い、時期差をもつか)構成をなす可能性がある。この3期においては、東西は不明(現況では1号柱列の西方約50mで谷地形となる)だが、南北方向に少なくとも60mの範囲を敷地としたことが推定される。他に該期の遺物は3、33等がある。

4期 遺構は確認されなかった。遺物は8、34がある。今改めて1次出土遺物(コンテナ3箱)を見ると7世紀前半～9世紀後半頃の須恵器が認められ、1次1号溝出土品中、8世紀前半～中葉としたものは8世紀後半～9世紀代が主とみられた。1号溝はIV-1群の建物とは軸方位が若干ずれており4期に含まれる遺構と考える。また、1次1号建物(床面積97.2㎡)は南東面に庇を伴い、当期には調査区東方への新たな建物群の展開が推定されるが、それらは9世紀後半まで継続した可能性がある。

さて、古府タブノキダ遺跡の立地する台地は昭和40年代に南ヶ丘団地や高校、自動車学校等の建設により旧地形が大幅に改変され遺跡も削平されている。第1図に1次報告書に掲載された旧地形図を重ね、図版1右下には昭和37年に撮影された航空写真を掲載した。これによるとかつては南谷池の南西に小谷が深く入り込んでいた。南谷池も以前は谷であったと思われ、これら小谷が入り込む台地における遺跡立地は、台地上の東と西、台地北西裾、北東裾などいくつかのブロックに分かれていることが推測される。最後に、今回調査区の北東約750m、台地裾からわずかに平地に下りた場所には七尾城跡小池川原地点が知られる。8世紀代の官人居宅とされる施設群を検出した遺跡であり、ここでは1,000㎡の調査面積ながら約40箱の遺物出土をみた。1・2次調査合計2,000㎡で6箱という古府タブノキダ遺跡とは大きく対比されるもので、本遺跡調査箇所については、居住ではなく実務が執り行われた区域にあたるのかもしれない。周辺の遺跡を含めいづれ検討を深めたい課題である。



調査区遠景（南から）



調査区遠景（南東から）



調査区遠景（西から）



調査着手前の状況（南西から）



航空写真（昭和37年撮影）



S I 1 完掘状況 (東から)



S I 1 炉 検出状況 (西から)



S I 1 炉 完掘状況 (西から)



S I 1 西壁 No.1 (第13図5) 出土状況 (東から)



S I 1 北壁 焼土層検出状況 (南から)



S11・2 完掘状況 (西から)



S12 炉 完掘状況 (西から)



S13 完掘状況 (南から)



S14・SD2 完掘状況 (北から)



S B 1 周辺 完掘状況 (俯瞰)



S B 1 完掘状況 (東から)



S B 1 西側柱列 柱痕検出状況 (北から)



S B 1 - P 5 土層断面 (西から)



S B 1 - P 14 土層断面 (南から)



S B 1 - P 16 完掘状況 (南から)



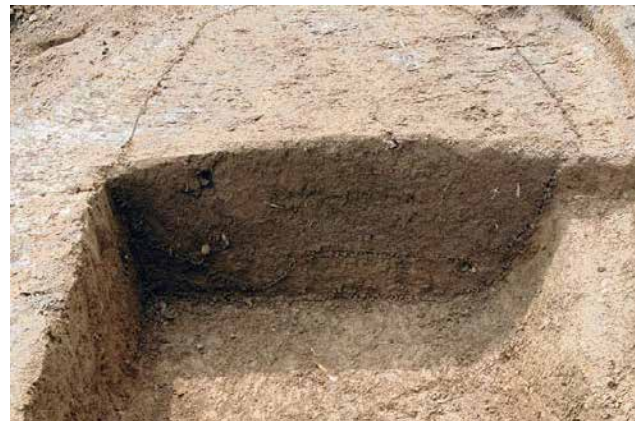
S B 1 - P 18完掘状況 (東から)



S B 1 - P 20完掘状況 (北から)



S K 1完掘状況 (東から)



S K 1土層断面コ (東から)



S D 2土層断面ス (北西から)



調査区北壁土層断面C (南から)



完掘状況全景 (西から)



S B 1掘削作業風景 (北西から)



報告書抄録

ふりがな	ななおし ふるこたぶのきだいせき							
書名	七尾市 古府タブノキダ遺跡							
副書名	一般国道 470 号 能越自動車道 七尾氷見道路建設に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 2							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	澤辺利明							
編集機関	公益財団法人石川県埋蔵文化財センター							
所在地	〒 920-1336 石川県金沢市中戸町 18 番地 1 TEL (076) 229-4477 FAX (076) 229-3731							
発行機関	石川県教育委員会・公益財団法人石川県埋蔵文化財センター							
発行年月日	2016 年 3 月 25 日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
ふるこ 古府タブノキダ 遺跡	いしかわけん 石川県 ななおし ちのまち 七尾市千野町、 みなみがおかまち 南ヶ丘町	17202	217800	37 度 00 分 59 秒	136 度 57 分 49 秒	20130606 ～ 20130826	1,000 m ²	記録保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
古府タブノキダ 遺跡	集落跡	古墳時代～ 平安時代	竪穴建物、掘立柱 建物、土坑、溝	土師器、須恵器、 刀子				
要約	<p>古府タブノキダ遺跡では昭和 57 年に発掘調査が実施されており、7 世紀後半～8 世紀後半にかけての掘立柱建物 15 棟以上が検出され、国衙・郡衙等の官衙か官衙関連施設あるいは有力豪族の居宅等の位置付けがなされている。今回はその約 45 m 南の台地端で調査を実施した。結果、炉や被熱部を伴う工房跡とみられる 7 世紀中葉～後半の竪穴建物 4 棟、8 世紀前半の掘立柱建物 1 棟などを検出した。掘立柱建物は 1 次調査で検出した建物と主軸方位が合致し、該期において少なくとも南北 60 m の範囲を敷地としたことが推定される。また、8 世紀後半～9 世紀後半の遺物も確認され、平安時代におよぶ遺跡展開の可能性が示された。</p>							

七尾市 古府タブノキダ遺跡

発行日 平成 28 (2016) 年 3 月 25 日

発行者 石川県教育委員会

〒 920-8575 石川県金沢市鞍月 1 丁目 1 番地
電話 076-225-1842 (文化財課)

公益財団法人 石川県埋蔵文化財センター

〒 920-1336 石川県中戸町 18 番地 1

電話 076-229-4477

E-mail address mail@ishikawa-maibun.or.jp

印刷 株式会社 ハクイ印刷